

第十二回 しませ 島清ジュニア文芸賞 受賞作品

『優秀賞』

【小学生高学年作文の部】

きん子ばあちゃんが教えてくれたこと

鳥越小学校 四年 石倉 いしくら 大輔 だいすけ

ぼくには、ばあちゃんが二人いました。三年前にきん子ばあちゃんが九十三才で亡くなりました。今は六十七才の元気なばあちゃん一人になりました。

ぼくの知っているきん子ばあちゃんは、自分の部屋からシュツシュツとすり足で出てきて、ぼくのとなりにペタンとすりこんでいつもテレビを見ていました。特にすもうが大好きでした。ぼくや妹と一しよにテレビを見て笑ったりして楽しそうでした。だから、いつまでもこんなだと思ひ、若い方のばあちゃんは、いつまでも元気いっぱい動き回っていると思ひました。

でもきん子ばあちゃんは、だんだん一人では何も出来なくなりました。トイレの時はだれかに手を引いてもらひ、おし車がないと家の中も歩けなくなりました。食事の時もむせたりして、かわいそうでした。そのうちベッドにねたきりになって、自分の部屋に食事を運んでもらって食べ

させてもらうようになりました。一日中ねむってばかりで、好きだったすもうを見せてあげても、きょう味を示さなくなり、ぼく達のこともだれだかわからなくなりました。妹は、よくきん子ばあちゃんの部屋に行つて絵本を読んであげたり、ごはんを食べさせてあげたりしていました。でもぼくは、だんだん一人では何も出来なくなるきん子ばあちゃんがかわいそう、あまりそばにはいけません。そして、とうとう亡くなりました。朝ごはんを食べいつも通りだったのに、急に息が苦しうになつて、親せきの人達が来たり、お医者さんが来たりして、家中があわただしくなりました。ぼくがねる時いつものように、「おやすみ。」

とつうとぼくの方をじつと見ていたのに、次の朝おきると亡くなつていました。病気でも事こでもないのできん子ばあちゃんが死んでしまった事が不思議でした。すぐかわいそうでかなしかつたです。

きん子ばあちゃんがねていた部屋は、今はぼくと妹の勉強部屋になっています。すっかり様子がかわつて、この部屋でねていたころのきん子ばあちゃんを思ひ出す事はありません。でもぼくの耳には、シュツシュツシュツというすり足の音が今でもこつています。食事の時だれかがむせると、必ずきん子ばあちゃんの事が話題になります。そんな時、死んでしまつてすがたは見えないけれど、今でも一しよにいるみたいに感じるのが不思議です。

ぼくには、もう一つ不思議な事があります。それは、ぼくがじいちゃんによくにているといわれる事です。ぼくは、じいちゃんの事はぜんぜん知りません。親せきの人が目になみだをうかべて、じいちゃんにそつくりやとぼくの頭をなでてくれるけど、ぼくはどう答えていいかわからずこまつてしまひます。

じいちゃんはガンで五十八才の時亡くなつたとばあちゃんが教えてくれました。そして、じいちゃんの事を色々話してくれました。じいちゃんが死んでしまつたのは悲しいはずなのに、なぜだか楽しそうにじい

ちゃんの事を思い出していました。

ぼくがなぜじいちゃんにしているのかと聞いたらばあちゃんは、きん子ばあちゃん、おじいちゃん、お母さん、大すけと、ずっと命がつながってきているのだと言いました。

「年をとって、自ぜんにろうそくの火が消える様にして亡くなつたきん子ばあちゃん。がんで五十八才までしか生きられなかったおじいちゃん。二人共命を一生けん命に生きたから、大ちゃんがいるのよ。」
とばあちゃんが言った時、ぼくは思いました。今は元気な文子ばあちゃんもいつかは、きん子ばあちゃんみたいになって、お母さんは文子ばあちゃんみたいになって、ぼくはお父さんになる。そうやってぼくも命をつないでいくのだと。

これまでぼくは、年をとる事、死ぬ事がこわくていやでした。不老不死の薬があればいいのにと思っていました。でも命のつながりを知り、ぼくの考えは変わりました。死んでしまつたら何もかも消えて無くなるのではない。不老不死を望むよりも、一生けん命に生きてぼくも命をつなぎたい。

ぼくは小さいころから、ロボット博士になるのがゆめでした。目を閉じて、ずっとずっと先の事を想ぞうしてみました。病院、ひさい地、宇宙、あらゆる所でぼくのチームが開発した、ぼくの分身のようなロボット達が、人の役に立って活やくしている様子。

一生けん命に仕事をがんばって、年をとり、いつかおじいちゃんになった時、ぼくにそっくりのまごが、この家で、この部屋で遊んだり、勉強したり、けんかしたり、笑ったりしている。ぼくににていると言われた時、よろこんでもらえるおじいちゃんになりたいです。命を大切にしたい、きん子ばあちゃんや、おじいちゃんのように一生けん命生きて行きます。

《選評》

四世代に渡る家族の、死や命のつながりを書いた作品です。重くながるがちなテーマにも関わらず、未来に向かって一生懸命頑張つて、代々繋がる自分の命を、次の世代に引き継いでいこうという決意に満ち溢れており、作者の表現力、文章をまとめる力量を感じる優れた作品です。